論説

「宇佐宮古図」の成立について

鈴木隆敏

はじめに

八幡宇佐宮には、境内の様相を伝える絵図が伝存している。そのなかでも、「宇佐宮古図」と「宇佐宮並弥勒寺造営指図」の二つは、大内氏によって実施された再興事業に関係する造営資料として、建物の位置・規模・構造などの分析対象となっている。「宇佐宮古図」（便宜「古図」と省略）は、境内域を中心に八幡信仰に関る堂舎を描いた絵図であり、「宇佐宮並弥勒寺造営指図」（便宜「指図」と省略）は、境内全域の指図で建物注記がある。

「宇佐宮古図」は、通称「応永古図」ともいわれ、大内氏による復興の状況を描くと考えられている。[1]「宇佐宮並弥勒寺造営指図」、通称「応永指図」が設計図であるならば、「宇佐宮古図」は完成予想図としての性格を持つものだと考えられている。この「宇佐宮古図」は、その後の境内図の模範とされており、慶長～寛永年間（一五九六～一六四四）の細川氏の復興状況を描いた「寛永五年絵図」は、これを手本にしながらその業績をより壮大に描いている。[2]このように後世の絵図作成の基本となった「宇佐宮古図」の性格を明らかにすることは、大内氏による事業の実態をはじめ、復興前後の宇佐宮・弥勒寺の変遷を知る上で重要な意味を持つと思われる。ここでは、その性格を分析する視点を求めるために、先行研究から課題を導き出したい。なお、資料の名称については、通称名称を用いると成立時期を考察する際に混乱するので、「宇佐宮古図」に統一しておきたい。

八幡宇佐宮の境内図を文献史料と比較し、その資料性を検討されたのが真野和夫氏である。真野氏は、宇佐宮弥勒寺旧境内の発掘調査にもとづき、「宇佐宮古図」・「宇佐宮並弥勒寺造営指図」と「寛永五年絵図」を中心に境内図の資料性を検討され、[3] 境内の発掘成果との比較から、伽藍配置の変遷について見解を示されている。[4]

これらの成果によれば、弥勒寺の建物が設計・配置変更されていることや、「宇佐宮古図」の中に虚像部分があり、それらは弥勒寺の建物に多く見えることが明らかにされた。延慶の大火以降、弥勒寺の建物と造営費用を鎌倉幕府に注進した文保二年(一三一八)三月三日「弥勒寺造営用途注文案」『益永家記録一』(弥勒寺造営記)の弥勒寺の建物四七件に対して、延慶二年(一三〇九)正月二十二日「八幡宇佐宮廻録注進状案」(鎌倉遺文二三五七〇、壬生文書八幡宮関係文書)の十四件と少ないことを指摘され、元暦元年(一一八四)の緒方惟栄による宇佐宮の破却、建久三年(一一九二)の金堂焼亡という度重なる火災によって、弥勒寺の実情は延慶二年の火災報告にある建物が存在していた程度のものであったことを述べられている。真野氏は、弥勒寺伽藍について、弥勒寺の活動に必須の金堂・政所屋は別にしても、東西宝塔・三重塔・新宝塔院(廻廊を含む)は応永の造営では復興されなかった堂舎とみられる部分とされ、宇佐宮全体としては、例えば大塔・五重塔・三重塔・直相殿などが検討課題だと述べられている。

また、建築史からの視点では濱島正士氏が、日本建築を詳細に描いた絵画・絵巻・寺社境内図・都市屏風図などの主要な作品をとりあげ、その作図法や描かれた内容の史実性を検討されている。[5] 濱島氏によれば、「宇佐宮古図」の作図法の特色として、建物を配置に従って正面図式または投影図式に描いて並べていることをあげられているが、描き方と建物の成立関係については論じられていない。

このように、「宇佐宮古図」の分析の視点は、虚像部分とされる建物をどのようにとらえるかが課題となる。立体的(正面図式)・平面的(投影図式)に描かれた建物と、その史実性の比較から宇佐宮古図の成立関係を具体的にできる可能性があると思われる。比較を試みる前に、「宇佐宮古図」の構図と描写について概観しておきたい。

1、宇佐宮古図の構図と描写

「宇佐宮古図」の原本は、縦一三五cm・横一三九cmの紙本で軸装されている。表具の際に四方約二cmの断ち切りが行われている。紙継は十五紙で軸装以前は、谷折と山折でたたまれており、画面下(和間浜・大鳥居・薦写)が山折で表になるために欠損箇所が激しく、補彩が施されている。トレース図の作製に際して原本を閲覧できたので、補彩・筆の違いや藍の染料の残存が判明し、河川を復元することができた。この成果により、八幡宮の境内域がさらに鮮明になったといえる。[6]

「宇佐宮古図」は南を画面の上、北を画面の下にしている。この古図の記載は、「馬場」・「大鳥居」・「大塔」という三つの記載のみで、大鳥居と大塔が大きく描かれていることから、表参道を基軸とした構図がより強調される。

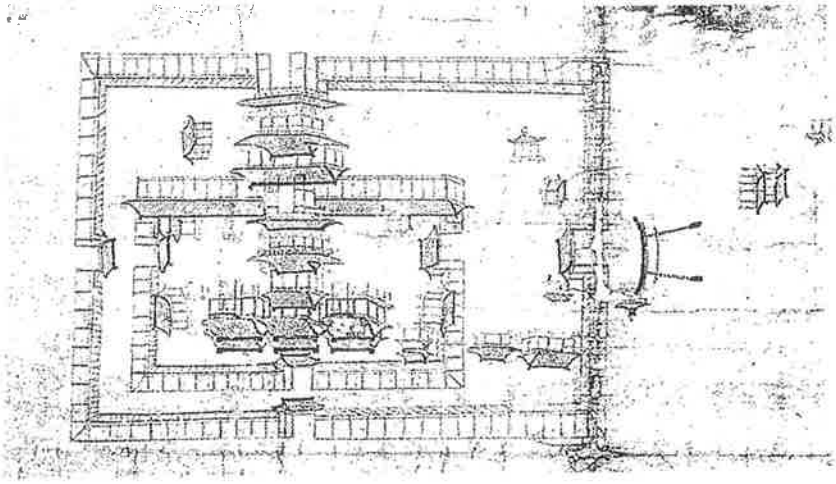
この大鳥居からまっすぐ南へのびる表参道を基軸にして、東側には八幡宮の正殿・仮殿(頓宮)、西側には弥勒寺の伽藍が大きく配されている。宇佐宮・弥勒寺は、堂舎の正面を南にとっているため、建物の描写は南向きとなっており、大鳥居・表参道・文字記載によって画面の方向が定まっているようにみえる。

古図を見ると、境内は川によって囲まれている。川は、いくつかの川が複合されて描かれている箇所もあるが、境内を取り巻くように寄藻川と御食川が流れ、その周囲を駅館川が囲むように流れている様子が描かれている。これらの川は、放生会の和間浮殿が配置されている周防灘の江海に流れていく。ここは江戸時代終わりから明治までは内海であり、寄藻川と周防灘によって形成された入海は豊前と豊後の国境であった。[7] この和間浜で放生会が営まれ、病や穢れが海に流されたのである。

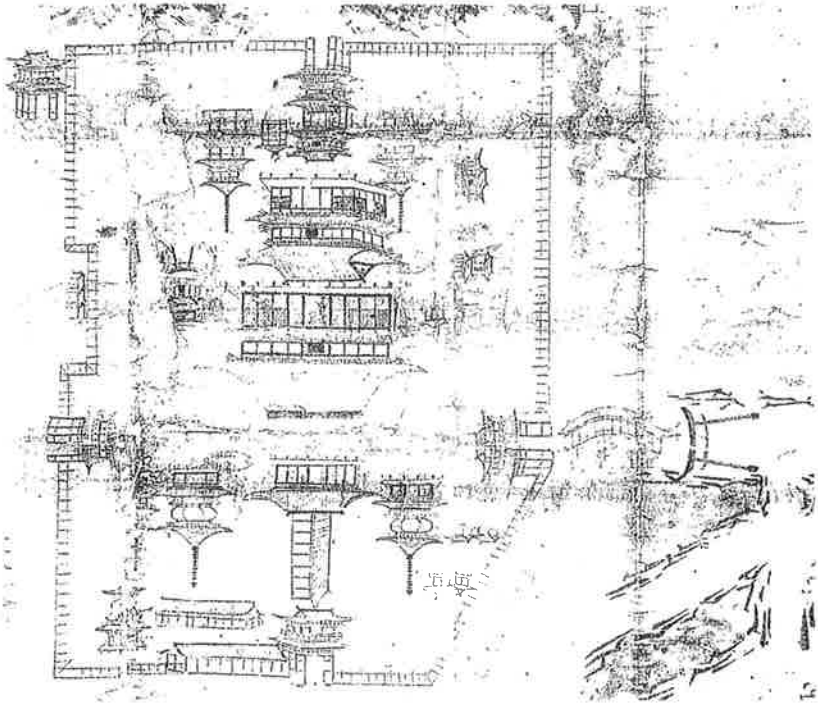
画面の端には、八幡神に縁のある八箇社[8]をはじめ、八幡神降臨の伝承をもつ御許山、放生会を行う和間浮殿、神体の薦枕となる薦を刈り取る薦社、八幡神が以前鎮座していた大尾社などが描かれている。このように宇佐宮境内は川と摂社によって幾重にも囲まれた聖域として表現されている。また、呉橋付近や寄藻川・駅館川を見ると、道や川に沿って屋根がたくさん描かれており、家々がびっしりと並んでいる様子が描かれている。[9] 川は世俗との境でもあった。

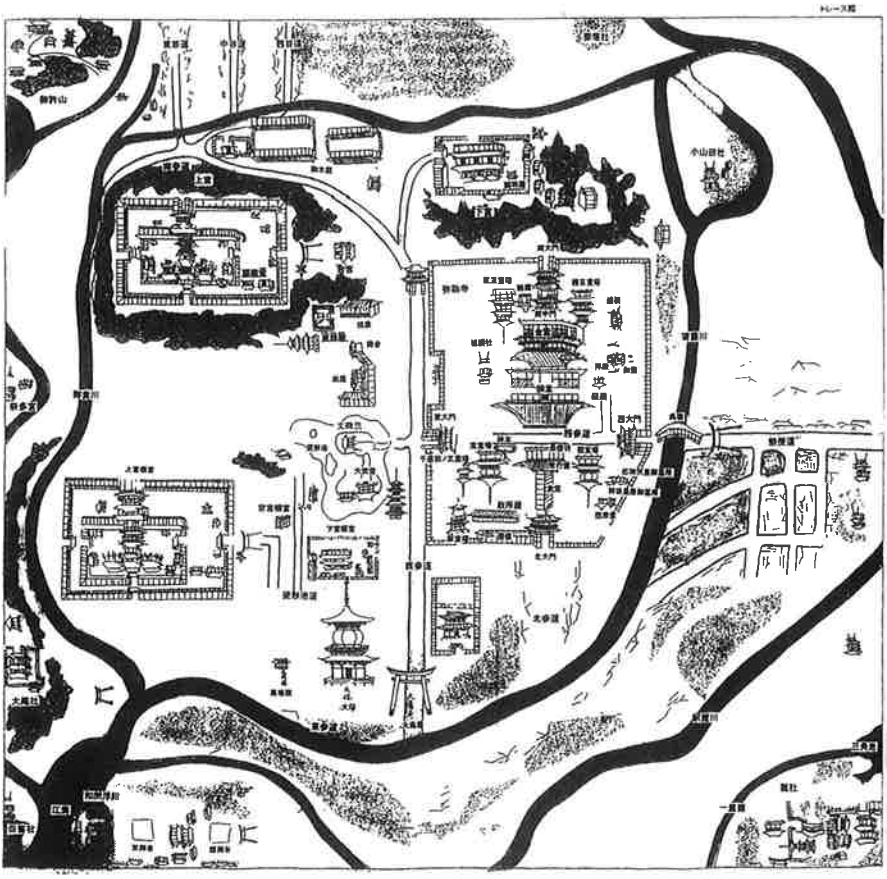
古図には、境内を囲む川と八箇社によって八幡宮の空間が表現されており、画面全体が宇佐宮の境内として描かれた構図で

〔A図〕上宮頓宮



〔B図〕弥勒寺





〔宇佐宮古図トレース図〕注６を参照

ある。周辺の社殿を一枚の構図に収めているのに対して、川や地形の描き方は部分的に正確であるため、構図にはゆがみがあると思われがちだが、以上のことから境内域を描くことを主眼に置いた絵図とみることができ、描かれた建物やその配置に重要な意味があると考えられる。

これから、古図に描かれた建物をみていくが、境内を構成する主要な建物として宇佐宮上宮・下宮・弥勒寺とそれらに付随する堂舎とに分けてみていきたい。建物の比定をするために、延慶の大火災から復興以降の堂舎に関する史料を整理したので、史料番号については注⑩を参照されたい。

〔宇佐宮上宮・若宮〕

上宮は、表参道に沿っていくと東西に森で囲まれた社殿がある。東側の森が亀山(小倉山)で、その嶺に上宮と若宮があり、西側の森に下宮がある。上宮と下宮は、ともに森の表現がなされていることから、特別な空間が意識されている。上宮には八幡三神を奉る一・二・三殿があり、下宮は上宮に付属した八幡神の新撰を調整する社殿である。

宇佐八幡宮本殿は、内院・造合・外院から構成される、いわゆる八幡造の建物で、史料②(八幡宇佐宮廻録注進状案)に「一御殿内外二宇」・「二御殿内外二宇」・「三御殿内外二宇」と記されているように二宇から成る社殿である。古図を見ると、この三殿を回廊が囲い、その外側をさらに玉垣が囲うという二重の空間構造になっている。史料⑤(宇佐宮権記)では玉垣と井垣の造営記載がある。回廊のことを史料②では「東西回廊」と呼んでおり、社殿の正面に「二階中楼」という三間一戸二重門を中心にして東西に向かって回廊が作られている。史料⑤ではこれを「上宮回廊」といい、史料②でいう「東西回廊」のことである。回廊は社殿の正面に設置され、側面と背後は玉垣となっており、東中門・西中門・北中門という四脚門が設置されている。この回廊の内部に本殿をはじめ、本殿の前面に講演堂(申殿)、上宮一殿の左側に北辰殿、東中門・西中門の近くに東脇殿(住吉殿)・西脇殿(春日殿)、東御湯殿・西御湯殿がある。この外側をもう一回り玉垣が囲い、正面にあたる三間一戸二重門

の二階南楼(史料②)、四脚門の東大門・西大門・北大門がそれぞれ配置されている。この玉垣の内部には、二階中楼の正面に国司屋・花机、西大門の近くに経蔵・衛士屋・幣殿、その北側に神輿宿と護摩堂がある。史料⑤では、史料②の二階中楼を「南中楼」、二階南楼を「南楼門」としており、「南中楼」には左に阿蘇大明神、右に高良玉垂大菩薩が安座した。西大門の正面には上宮の鳥居があり、その先に若宮がみえる。史料②では、「内外二宇各三間」とあるように上宮一殿分の大きさであるが、描かれているのは若宮だけで付属する建物や鳥居は描かれていない。史料⑤・指図にも若宮だけの記載となっている。表参道には三間一戸二重門がある。この門は、「二階楼門」(史料②)・「馬場楼門」(史料①)と呼ばれ、「廟宮総門、五月会之時、所繋休神馬也」(史料②)とあるように、二階楼門は宇佐宮上宮・若宮と下宮へ通じる門であり、神馬を繋ぎとめることから馬場楼門とも呼ばれている。史料⑤にある「楼門」がこれにあたる。

このように古図には、本殿を中心にして各方面の門が直線にならび、二重の社殿空間を構成する様子が描かれている。応永の復興時に上宮に初めて建てられたのは護摩堂で、本尊は不動明王であった。護摩堂は、「上様為御祈祷之」(史料⑤)として建てられており、「宇佐宮並弥勒寺造営指図」によってその位置が判明している。この護摩堂を除いて上宮の基本構造に大きな変化はないと思われる。

〔宇佐宮下宮〕

表参道から廟宮の総門である楼門をぬけた西側、森で囲まれたところに下宮がある。下宮は上宮に付随する建物で、八幡神に神饌を奉り、また八幡神の御神体である薦枕を調整するといった神事における多様な機能を有する建物の集合体である。下宮正面の御食川で供物を清め、御炊殿にて神饌を調整することから、下宮全体を指して御炊殿(おいどの)とも呼称される。史料②に「御炊殿三宇各三間号下宮」とあるように、三殿それぞれが一宇の切妻造の建物として描かれている。下宮に鳥居がないことから、八幡神を奉る建物ではなく、付随する建物であるために八幡造りを継承していないと考えられる。この三殿に平

行して講演堂(申殿)と回廊がある。これらの建物を中心にして周囲を井垣が囲っており、この井垣のことを史料②では「四面劔垣」という。表参道に面して四脚門がある。指図では「御門」とあり、この門に隣接して御炊殿がある。史料②・⑤・⑦では御炊殿を「竈戸殿」と記載している。『八幡宇佐宮御託宣集』によれば、「御社之傍有御竈戸、奉炊毎節御供、故号御炊殿」とあることから、御炊殿は竈戸殿であることがわかる。井垣の北側には御供所と厨屋、下宮一殿の後ろに北辰殿、西側に鵜羽屋がある。井垣の外側には、南から順に記すと、経蔵・御幣殿・御湯殿・御輿屋・聞持堂が設置されている。

下宮の機能を担う重要な建物に鵜羽屋がある。八幡神の御神体は、御験(みしるし)と呼ばれる薦で作られた枕で、薦社の三角池で刈り取った薦を鵜羽屋において枕に調整する。そして、新しい御験を御輿に乗せて田笛社・鷹居社・瀬社・乙咩社・大根川社・妻垣社・小山田社などの八幡縁の霊地をめぐって宇佐宮上宮に納め、古い御験が奈多宮に納められる。この神体更新儀礼は行幸会と呼ばれ、大内盛見が復興させている。史料⑤には、鵜羽屋の造営と行幸会の記載があり、正殿の造営に合わせて新しい御神体が作られたのである。古図には、画面の右下に薦社、画面の左端中央に奈多宮が描かれている。

〔上宮仮殿・若宮仮殿・下宮仮殿〕

上宮・若宮・下宮それぞれの仮殿の描かれ方は、上宮・若宮・下宮と変わらない。ただし、下宮の井垣の外側に配されている四棟の建物が井垣のなかに描かれている。上宮仮殿の鳥居の近くに若宮仮殿があり、史料②には「若宮頓宮」とみえる。史料⑤には「頓宮立柱上棟」とあり、後述するが上宮頓宮と考えられる。

〔弥勒寺〕

弥勒寺は、西参道を挟んで伽藍が南北に配置されている。弥勒寺は、南大門を伽藍の正面とし、西大門・東大門・北大門が配されている。上宮と同様、各方面の門が中核となる金堂・講堂を直線で結ぶという建物配置が描かれており、金堂・講堂・

長僧坊・食堂を中心軸にして、その両脇に堂舎が配置されている。勅使街道に面する西大門には、呉橋がかけられ、西大門から東大門にかけて西参道が表参道へ向かって延びている。

弥勒寺の伽藍配置は、金堂の南に東塔・西塔を配置する薬師寺式の伽藍配置をとっている。金堂・講堂は二重の建物として描かれ、東西南北と南中門に三間一戸二重門を配置する。金堂の正面には南中門があり、その両脇に西三重塔・東三重塔・輪蔵が描かれている。輪蔵は、指図との比較でその名称と位置がわかる。史料③では南中門のことを「二階南楼」と記載しており、一宇五間の瓦葺の建物となっている。金堂の西側には、鐘楼・伽藍社、講堂の西側には経蔵があり、伽藍社・経蔵は史料⑤で確認できるが柱間の記載はない。史料②では、「二階鐘楼一宇三間」・「二階経蔵一宇三間」とあり、この二棟は楼造である。指図をみると、経蔵は二つある。講堂の西側・新宝塔と食堂の間にあって、古図では講堂の西側に宝形造の建物があり、経蔵とみられる。（ただし、楼造ではない。）東側には祇園社が描かれているが、この部分は折目となっていたために欠損している。指図の回廊・廟ノ屋・礼堂・四王堂などが描かれていたと思われる。西参道の北側には、長僧坊と食堂の両側に東宝塔・西宝塔が配されている。長僧坊は史料⑤と指図にみえ、指図では長僧坊と常行堂を合わせて一宇の建物として設計変更されている。この長僧坊と東宝塔との間に八幡神の神木が描かれ、その東宝塔を挟んで東側に、指図にある千歳松ノ三重塔とみられる三重塔がある。東宝塔の北側には、新宝塔があり、北大門に重なるようにして新宝塔の回廊とみられる建物と政所屋が平行して描かれている。西宝塔の西側には、指図にある応神天皇御墓所・神功皇后御墓所・護摩堂がみえる。

古図に描かれた建物について概観したので、それをふまえて今度は宇佐宮古図を描いた絵師の視点を探っていきたい。宇佐宮上宮・下宮・上宮仮殿・下宮仮殿を見ると、建物が立体的に重なっている様子が描かれている。このような俯瞰的な図を描くためには、亀山より高い場所でなければ描写することはできないため、絵師による想像上の視角となる。しかし、実在する建物を描く際にとられた手法が、建物を立体的に描くことであったとわかる箇所がある。その表現法について上宮仮殿の南中

楼と国司屋を見ると、国司屋の屋根に南中楼の一階足元が透けて見えることから（A図参照）、絵師は実際にある建物を忠実に描いたと考えられる。また、東湯殿・西湯殿が回廊に隠れる様子が描かれていることから、上宮の書き順は中核となる本殿から書き始めて、回廊を含む内部の建物、そして外周の玉垣の内部というように描いていったと思われる。下宮や上宮仮殿・下宮仮殿も同様の手法によって描かれたのであろう。上宮と上宮仮殿を比較すると、絵師の視点が移動していることがわかる。西大門・西中門と北大門・北中門の向きの描き方が反対になっており、仮殿を描く際に上宮の描写をコピーしたのではなく、実際に建物を見た方向から描いたと思われる。

では、弥勒寺はどうであろうか。弥勒寺の描写は金堂や鐘楼、南大門・南中門・西大門・東大門・北大門・呉橋などは立体的に描かれている。建物が重ねて描かれているのは、南大門と南中門、北大門と回廊などが確認できるが、講堂・長僧坊・食堂・東西三重塔・東西宝塔・新宝塔などは平面的に描かれている。（B図参照）

このように宇佐宮と弥勒寺とでは、その描き方にはっきりとした違いがみえる。以上をふまえて、次に描写と史料との対応について、弥勒寺の発掘成果もふまえて詳しく比較していくことにする。

2、宇佐宮古図の成立

（1）虚像部分の検証

「宇佐宮古図」の構図と描写についておおまかに確認したうえで、これからは虚像部分の解釈のために、建物描写と史料との比較に重点を置いて進めていきたい。古図の建物描写には、立体的な描き方（投影図式）と平面的な描き方（正面図式）がなされている。宇佐宮上宮・下宮、上宮仮殿・下宮仮殿が立体的に描かれているのに対して、弥勒寺の建物は金堂・鐘楼・東西南北の大門・南中門を除いて、ほとんどが平面的に描かれている。

「宇佐宮古図」の建物描写と文献史料とを比較して、堂舎の存在関係を表にしたのが〔表1〕・〔表2〕である。〔表1〕

〔表１〕宇佐宮古図の建物描写比較（１上宮・下宮）

区　域	注進状 1309	構　造	棟記 1433	掟書 1455	下宮回禄 1489	勘考 1523	古図 描写
宮中分 （上宮）	一御殿	内外２宇各３間	◎			◇	●
	二御殿	内外２宇各３間	◎			◇	●
	三御殿	内外２宇各３間	◎			◇	●
	申殿《講演堂》	１宇２間	◎			◇	●
	北辰殿	内外２宇各１間	◎			◇	●
	東西脇殿	２宇各１間	◎				●
	東西御湯殿	２宇各１間	◎			◇	●
	東西廻廊	18間	◎				●
	御輿宿	１宇３間	◎			◇	●
	国司屋	１宇５間					●
	西北衛士屋（※１）	２宇各１間	◎				●
	二階中楼 《南中楼》	１宇３間４足	◎			◇	●
	二階南楼（※２） 《南楼門》	１宇３間４足	◎			◇	●
	西大門	１宇１間４足	◎			◇	●
	西中門	１宇１間４足	◎				●
	東大門	１宇１間	◎			◇	●
	東中門	１宇１間	◎				●
	北大門	１宇１間	◎				●
	北中門	１宇１間	◎			◇	●
	幣殿	１宇１間	◎			◇	●
	四角内外玉垣 〈四面内外玉垣〉	162間	◎				●
	〈鳥居〉	（１基）		□ （修造）			○
	〔護摩堂〕（※３）		◎			◇	○
（若宮）	若宮殿	内外２宇各３間	◎	□ （修造）		◇	●
	同三面玉垣	13間					
	同鳥居	１基					
（下宮）	御炊殿 （下宮三殿）	３宇各３間	◎		◇ （※４）		●
	申殿 《講演堂》	１宇７間	◎ （修造）		◇		●
	御供所	１宇３間			◇		●
	竈殿（※５） 〔御炊殿〕	１宇５間	◎ （修造）		◇		●
	四面翻垣	48間	◎				●
	〔北辰殿〕	［１宇］		□ （造営）	◇		●
	〔厨屋〕	［内外２宇］					●
	〔廻廊〕		◎ （修造）		◇		●
	〔鵜羽屋〕		◎				●
	〔御来屋〕 〔御輿屋〕	［１宇］		□ （造営）	◇		●
	〔御湯殿〕	［１宇］			◇		●
	〔御幣殿〕	［１宇］			◇		●
	〔経蔵〕 《経所》	［１宇］	◎ （修造）		◇		●
	〔開持堂〕						●
	〔御門〕						○

（諸堂社）	若宮酒殿	内外２宇各３間					
	同御供所	１宇３間					
	同竈殿	１宇５間					
	厨家	１宇５間					
	同具屋	２宇各３間					
	内庁	１宇５間					
	直相殿（※６）	１宇５間					●
	二階楼門〈馬場楼門〉 〈馬場楼門〉	１宇４足 〔１宇〕	◎			◇	●
	馬場頓宮	１宇３間					
	同若宮頓宮	１宇２間					●
	馬場庁 〔馬場殿〕	１宇５間					●
	同弁官所	１宇５間					
	第二宝蔵	１宇１間４面					
	経蔵《一切経蔵》	１宇１間４面	◎				●
	法華三昧堂 （大弐堂）	１宇		□ （修造）		◇	○
	馬場三重塔	１基					
	祈皇寺	１宇					
	黒尾社						
	大鳥居						○
	宮曹司	３宇各５間					
	〈中津尾観音寺〉						
	〈酒殿〉	〈１宇〉					
	〔上宮仮殿〕						●
	〔下宮仮殿〕			□ （修造）			●

【出典史料】注進状：史料②　権記：史料⑤　掟書：史料⑥　下宮回禄：史料⑦　勘考：史料⑧

【凡例】

〈　〉＝史料①　　◇＝焼失記載　　◎＝造営記載

《　》＝権記　　△＝材木調達　　□＝造営・修造命令

［　］＝下宮回禄　　○＝平面描写　　●＝立体描写

〔　〕＝古図に描かれた建物

※１＝古図・指図ともに西衛士屋１宇となっている。

※２＝権記では、南中楼・四方二重門と記載があることから、南楼門と思われる。
　　勘考では、「南中楼門・南大門」とあることから、南楼門に比定。

※３＝10月２日「大内徳雄(盛見)書状」(到津文書一)には、「当社護摩堂事既造畢」とある。

※４＝下宮回禄では、厨屋・庁屋・下宮四門・大雑屋などの建物はすでに傾倒しているとある。

※５＝「八幡宇佐宮御託宣集」に、「御社之傍有御竈戸、奉炊毎節御供、故号御炊殿」とある。
　　指図にて下宮仮殿をみると「小炊殿」とあって、下宮での配置がわかる。

※６＝応永29年６月13日「宇佐宮条々事書案」(到津文書一)には、「直相殿・講演堂・楼門・南中楼、其外殿々者、差図可有調進」と大内盛見の命令がある。

〔表２〕宇佐宮古図の建物描写比較（２弥勒寺）

区　域	注文案 1318	構　造	注進状 1309	元・文 1328	権記 1433	掟書 1455	勘考 1523	古図描写	遺構
弥勒寺	大講堂	１宇７間４面瓦葺	◇	◎				○	検出
	金堂	１宇５間４面瓦葺	◇	◎	◎	□（修造）	◇	●	検出
	回廊56間	３棟瓦葺	◇	◎	◎（※1）			欠損	
	四王堂　本堂・礼堂	３間４面瓦葺	◇	◎				欠損	
	地主伽藍神殿	２宇瓦葺	◇	◎	◎			●	
	経蔵〈二階経蔵〉	１宇二重瓦葺	◇	◎	◎（※2）			○	
	鐘楼〈二階鐘楼〉	１宇二重瓦葺	◇	◎	◎（※3）		◇（※4）	●	検出
	東三重塔	１基瓦葺						○	検出
	西三重塔	１基瓦葺						○	検出
	二階南楼〔南中門〕	１宇５間瓦葺						●	
	食堂１宇瓦代							○	
	東大門	１宇３間瓦葺	◇	◎	△	□（造営）		●	検出
	西大門	１宇３間瓦葺		◎	△		◇（※5）	●	
	南大門	１宇３間瓦葺		◎				●	
	北大門	１宇３間瓦葺		◎				●	
	法花新三昧堂	１宇	◇						
	常行堂	１宇	◇					○	
	本三昧堂	１宇	◇						
	蓮蠡寺	１宇	◇						
	岩屋寺	１宇	◇						
	多宝塔	１宇							
	法花堂	１宇	◇						
	西常行堂	１宇	◇						
	渡殿	２宇瓦葺							
	〔長僧坊〕	僧坊１宇 瓦葺60間（16間）			△			○（※6）	
	東宝塔	１基瓦葺						○	
	西宝塔	１基瓦葺						○	
	新宝塔	１基瓦葺・回廊						○	
	勾殿	１宇桧皮葺							
	佛供備屋	２宇桧皮葺							
	桧皮葺屋	１宇							
大衆院分	桧皮葺屋	１宇							
	政所屋	１宇５間４面瓦葺						●（※7）	
	第一甲蔵	１宇瓦葺							
	第二板蔵	１宇							
	第三丸蔵	１宇							
	第四板倉	１宇							
雑屋分	東面	２宇桧皮葺						●	
	西面	２宇桧皮葺						●	
	北面	２宇桧皮葺						●	
	大炊屋	１宇瓦葺							
	湯屋〈温屋〉	１宇５間２面瓦葺	◇						
	東司厠	１宇５間桧皮葺							
	築垣100本	四方瓦葺 １宇12間４面に１丈 ３尺間板葺							
	木屋	４宇						●	
	行事屋	１宇５間７尺間萱葺							
	用材木屋已下瓦等分								
	〈呉橋〉		◇		◎			●	

宇佐宮古図	〔輪蔵〕※8							○	検出
	〔三重塔婆〕※9				◎	□（修造）		○	
	〔南中門〕							●	
	〔祇園社〕							●	
	〔護摩堂〕							●	
	〔神功皇后御墓所〕							●	
	〔応神天皇御墓所〕							●	

【出典史料】注文案：史料③　注進状：史料②　元・文：史料④　権記：史料⑤　掟書：史料⑥
勘考：史料⑧
勘考：「宇佐宮回禄勘考」（『神道体系』神社篇47宇佐）

【凡例】

〈　〉＝史料②　　◇＝焼失記録　　◎＝造営記載
〔　〕＝古図にみえる建物　　△＝材木調達　　□＝造営・修造命令
○＝平面描写　　●＝立体描写

※１＝史料②の左右廻廊・東西廻廊に比定。指図ではＬ字型に変更。左右寺庫についてはわからなかった。

※２＝指図には講堂の左と、食堂と新宝塔の間に経蔵がある。古図には講堂の左に宝形造りの建物があり、経蔵とみられる。

※３＝永享２年に鐘を鋳造。

※４＝「宇佐宮回禄日記」（薬丸文書41『大分県史料』２第一部）には、元和10年に階造とあり、大永３年以降は失われていると思われる。元和３年に弥勒寺西大門立柱とある。

※５＝「宇佐宮回禄日記」（薬丸文書41『大分県史料』２第一部）には、「仁王門」とあり、指図にも西大門にも「仁王」の記載があるので比定した。元和３年に弥勒寺西大門立柱とある。

※６＝常行堂と長僧坊を一棟の建物としてまかなっている。

※７＝指図では13間×３間に細長い建物に変更。

※８＝東三重塔跡に造営。

※９＝千歳松ノ三重塔と考えられる。

は宇佐宮上宮・若宮・下宮を対象にした。延慶二年(一三〇九)の大火から大内氏の復興、永正十五年(一四八九)の下宮焼失、大永三年(一五二三)の宇佐宮・弥勒寺焼失に係わる史料から、十四～十六世紀にわたる建物の存続状態を比較して表にまとめたものである。〔表2〕も同様に、十四～十六世紀にかけての弥勒寺堂舎について史料比較を行い、発掘成果と照合した。〔表1〕・〔表2〕では、焼失記載を◇、造営記載を◎、造営・修造命令を□で示している。この表記が、例えば◇・◎・□・◇のように連続して、最後に◇で焼失が確認された建物は、その存在を確実視していいと思われる。また、古図における立体描写の建物については●、平面描写の建物については○で表記したので、描写と史料との対応を比較できると思われる。以下、上宮・若宮・下宮とそれぞれの仮殿、弥勒寺について結果を述べていきたい。

〔上宮・若宮・下宮〕

〔表1〕の結果、宇佐宮上宮・若宮・下宮の主要堂社においては立体的な描写と記録のほとんどが一致した。「宇佐宮古図」では、復興をとげた社殿を立体的に描いていることが判然とする。下宮をみると、大内盛見による事業のほとんどは修造となっている。康正三年～明徳元年(一三三一～九〇)まで下宮と下宮仮殿の造営が行われていることから[11]、下宮仮殿は造営されており、下宮は修造で済ませることができたのだろう。

宇佐宮に付属する諸堂舎はどうであろうか。応永二九年(一四二二)の「宇佐宮条々事書案」[12]には、「直相殿・講演堂・楼門・南中楼、其外殿々者、差図可有調進」とあり、大内盛見が設計図の提出を命じている。このうち、講演堂・楼門・南中楼は上宮の社殿であるが、直相殿は宇佐宮境内に配された堂舎である。史料②には、「勅使都督之参宮遷宮還宮之議、或年中度々之神事、於此勤行也」「後白河院可有御詣之由、被仰下之時、社家所構　皇居也」とあるように、直相殿は天皇・勅使・都督などの宿泊所となっている。古図では、上宮の麓にある三重塔のとなりに井垣と四脚門で囲まれた建物として描かれている。直相殿の描き方をみると立体的に描かれていることから造営されたと考えられる。

摂社においては、応永二七年(一四二〇)と正長二年(一四二九)に和間浮殿が造営されており(史料⑤)、古図には、「和間浜放生会法用場荘厳并仮屋形絵図」(応永二七年)に描かれた浮殿・大鳥居・西舞台・東舞台・市目代の仮屋などが、立体的に描かれている。応永三四年(一四二七)には、「大貞薦社南中楼門立柱上棟」(史料⑤)とあり、古図では薦社に三間一戸二重門が精密に描かれている。

〔上宮仮殿・若宮仮殿・下宮仮殿〕

上宮・若宮・下宮の仮殿は立体的に描かれているが、記録が乏しく正確には把握できない。仮殿については、嘉暦元年(一三二六)に宇佐宮臨時仮殿(本宮仮殿・西大門)が焼失し、元徳三年～明徳元年(一三三一～九〇)にかけて下宮と下宮仮殿の造営が行われている。[13] このことから、応永二七年(一四二〇)に「頓宮立柱上棟」(史料⑤)とあるのは、上宮の仮殿だと考えられる。[14] 応永二九年(一四二二)には大内盛見が、一・二・三殿・若宮殿・北辰殿を仮殿へ遷宮させるように命じており、上宮三殿の造営に合わせて準備させたものである。また、康正元年(一四五五)の大内教弘の修造に、下宮仮殿の桧皮葺(史料⑥)とあることから、「宇佐宮古図」の上宮・下宮の仮殿は存在したと考えられる。立体的な仮殿の描き方をみても、古図の仮殿は存在したと思われる。

小結

「宇佐宮古図」に描かれた上宮・若宮・下宮、仮殿については、大内氏の再建事業で造営された建物で、その様相を立体的に描いている。宇佐宮に付属する諸堂舎や摂社については、それぞれ史料との検証が必要であるが、直相殿・和間浜浮殿・薦社の南中楼門の比較において部分的に確認できた。ただし、平面的に描かれた建物が存在しないとは限らず、護摩堂や法花三昧堂(大弐堂)は史料で確認できるので、平面的な建物にも注意しなければならない。[15]

〔弥勒寺〕

弥勒寺については、昭和二九年から三五年[16]、五六年から六三年[17]にかけて行われ、寺域と主要な伽藍が判明している。昭和五六年以来の調査では、金堂・講堂・東塔・輪蔵・東大門・西大門などが確認されている。創建期から九世紀まで存続したとみられる東築地とこれにともなう棟門、寺域の北を限ると見られる大溝等が確認され、寺域の南北長は最大約二三五mになることが明らかになった。平成五年から現在[18]の調査では、西塔・鐘楼などが確認されている。これらの発掘成果をふまえて〔表2〕と比較した結果を個別に述べていきたい。

金堂

金堂は、桁行七間(約二七m)・梁間四間(約一七m)の建物で、史料②によれば、「五間四面」の建物である。発掘の結果、十三世紀後半〜十四前半を上限とした時期に基壇の拡張が認められている。基壇の規模は、東西約二六m・南北約一六mと考えられている。金堂は基壇を拡張しているが、その規模は創建以来の「五間四面」の建物であったとみられている[19]。

延慶の大火以降、「元暦文治記」(史料④)には嘉暦三年(一三二八)に金堂の立柱上棟とあるが、「宇佐宮権記」(史料⑤)では、応永の復興が始まった時には、金堂の基壇は荒れ果てていたという。元亨元年(一三二一)から弥勒寺の再建が鎌倉幕府によって行われるが、宇佐宮の造営と重なって造営料の徴収は困難を極めており、金堂の造営は仮堂程度のものであったと考えられている[20]。

金堂の再建は、応永二七年〜永享三年(一四二〇〜三一)の造営、康正元年(一四五五)からの修造という長期に渡っての造営であった。延慶の大火以後、弥勒寺の食堂跡講堂後門に仮堂をつくり、新しく造立された金堂本尊薬師如来と講堂本尊弥勒菩薩を入堂させている。応永二八年(一四二一)には礎石を据え直して金堂が立柱上棟し、応永三四年(一四二七)には瓦葺、仏壇壁板が造作され、金堂へ薬師如来が遷座した。永享二年(一四三〇)には薬師如来の彩色が調っている。しかし、康正元年(一

四五五)の段階では、「金堂造作未周備歟、尋究之、可加造営者也」(史料⑥)とあり、金堂はまだ完成をみていない。

大永三年(一五二三)には金堂の焼失記載があることから(史料⑧)、応永から康正以降に再建・補修されて、大永三年まで存在したと考えられる。これらのことから、再建された金堂を古図に描いたことは確実となる。古図に描かれた金堂は、五間四面(梁間は一間多い)、二重の建物である。

講堂

講堂は、桁行九間(三三m)・梁間四間(一四m)の建物で、史料②では「七間四面」の建物である。基壇の規模は、東西約三八m・南北約一九mで、周囲に雨落ち石敷をめぐらし、基壇や礎石は創建期を踏襲している。この外側を幅およそ一.四mの大溝がめぐっている。この溝から大量の中世瓦が細片となってみつかっており、平安・中世の資料は検出されているが、近世瓦は検出されていないことから、出土した瓦は大永三年(一五二三)の火災で廃棄されたものと考えられている。

これらの瓦は、元亨二年(一三二二)の造営期の軒丸瓦・軒平瓦Ⅰ類、応永期の修理瓦Ⅱ類a、その後の修理瓦Ⅱ類bと整理されている。基壇端付近(Kｏ-Ⅲ区)では、整地と整備が確認されており、軒平瓦Ⅱ類bが出土したことで、大溝と基壇の整備は大内氏の復興に関わると考えられている。[21]

この結果から、真野氏が講堂について詳細な検討を行っている。それによれば、「元暦文治記」(史料④)の「弥勒寺一宇七間四面号大講堂」という記載と、近世絵図に共通して講堂を「弥勒寺」としていることから、講堂=弥勒寺を意味する可能性を示されている。真野氏は、大永三年(一五二三)で焼失した「弥勒寺金堂」という記載を、講堂・金堂という解釈ができるのでないかと考察され、元亨二年(一三二二)以来の講堂は仮講堂であり、その造営は大内氏に引き継がれ、大永三年(一五二三)の火災で焼失して瓦が破棄されたか、或いは細川氏の修造で瓦が葺きなおされたのではないかという見解を出されており、細川氏の段階で修理したとある「仮金堂・仮講堂」の建設時期に関連させている。[22]

弥勒寺＝講堂という呼称については、首肯できる見解だと思われるが、弥勒寺と講堂が同一の意識を持つ史料年代に注目すると、近世における呼称であることが重要であると思われる。

弥勒寺＝講堂と考える根拠となっている大永三年（一五二三）の焼失堂舎に関する史料年代をみると、近世の編纂物であることがわかる。「宇佐宮回禄勘考」は、寛弘六年（一〇〇九）から享保八年（一七二三）までの造営について、宇佐宮政所総検校益永一学が考証した記録で、編者である益永一学は別の史料で明和二年（一七六五）にその名前が見える。[23]「宇佐宮本殿末社并堂舎炎上考畧記」は、「至宝永八二百五」という端書から宝永八年（一七一一）には編纂されたと思われる。「宇佐宮回禄日記」の成立年代は判然としないが、記載から元和十年（一六二四）以降となる。「宇佐宮回禄并造営覚書」についても、記載から慶長十五年（一六一〇）以降に編纂されたものである。

「元暦文治記」（史料④）については、「慶応三年卯年五月十六日両日之内、以漆嶋宿禰並継所持之本写之畢」「明治四辛未年八月十八日、以宝暦四年六月十五日政所総検校宇佐宿禰光輔書写之本交合、傍記、不同之字、聊愚意書入畢」とあり、近世から明治にかけて編纂されたものであることがわかる。「一　弥勒寺一宇七間四面号大講堂」が、インデックスとして編集の時に付け加えられたものだとすれば、近世絵図に共通する講堂＝弥勒寺という認識がなされた時期と一致するので、近世における講堂の呼称が弥勒寺であったと考えられる。

また、講堂の発掘調査では大溝から大量の中世瓦が出土しており、大永の火災で廃棄されたと考えられている。報告書[14]では、「応永期の復興の主体は金堂であり、応永期の修理瓦としたものは金堂に用いたものを流用したものである。」との見解も示している。このことからすれば、溝に廃棄された瓦が講堂のものか金堂のものかを判別するのは難しいと思われ、講堂の存否についてはさらなる史・資料との比較が必要となる。本論では以上をふまえ、史料から講堂の検証を行いたい。

講堂は、〔表2〕で整理したように、造営記録にはなく、平面的に描かれているので、講堂の再建には疑問がある。

大内盛見による造営期間は、「宇佐宮権記」（史料⑤）によれば応永二五年（一四一八）四月二十六日～永享三年（一四三一）正

月十六日までとなっている。その間の弥勒寺造営は、金堂と三重塔婆の造営と各本尊・脇侍の造作と調整で終了している。

講堂については、本尊と脇侍に関する記事がある。「宇佐宮権記(史料⑤)」永享二年(一四三〇)八月三日条では、講堂脇侍の無著菩薩・世親観音が京都で造作されており、八月十三日の薬師如来の彩色が調ったことをうけて、大内盛見が弥勒菩薩の彩色もするように命じている。「弥勒仏ヲモ可有御彩色之旨、被仰出之畢」という文言からも、命令がでるまで弥勒菩薩の調整が行われていなかったことがわかる。応永三四年(一四二七)六月に薬師如来が金堂へ遷座しているが、弥勒菩薩が講堂へ遷座したという記事はない。

「宇佐宮権記」(史料⑤)応永三四年六月八日条では、金堂に薬師如来が遷座した記事に、「霊鷹金堂ノ上ヲ飛廻ケルコソ目出ケレ、弥勒寺、同金堂ハ潔戒清浄之蓮臺、五障女人不入霊地也、大菩薩毎日御参堂在テ弥勒・薬師ノ二尊ヲ御拝礼在之」とある。この記事からは、八幡神の化身である鷹が、金堂の上を飛び回ったとあり、金堂の再建を象徴している。「弥勒寺、同金堂」という記載は、こうした意味を示すものだと思われ、講堂を鷹が飛び回ったという記事がないことから、講堂は再建されていないと考えられる。

永享三年(一四三一)六月には推進役の大内盛見が急死して造営は一時中断することになった。事業を引き継いだ大内教弘は、康正元年(一四五五)に宇佐宮・弥勒寺を修造する命令を出しているが、講堂に関する記載はなく、大永三年(一五二三)の火災にも講堂の記載はない。

「元暦文治記」(史料④)では、元亨三年(一三二三)に弥勒寺講堂立柱上棟とあるが、鎌倉末期の政治状況のなかで思うように復興を遂げることができず、中断してしまったことがうかがえる。このことは、史料⑤にて金堂が荒れ果てた状態であるという記事にもあるように、講堂も同様の状態であったと推測できる。

また、講堂の造営費(史料③)は、金堂が銭五六二七貫二二〇文に対して、講堂が銭一九一〇八貫一〇〇文という四倍近い費用が算出されており、こうした予算の都合もあって、再建の主軸が金堂に置かれたと思われる。

このように、大内氏の復興においては金堂の再建が優先されており、薬師如来遷座の記事からみても、講堂は再建されなかったと考えられる。金堂の造営と本尊の調整が終わった後で、講堂本尊の調整に着手していることは、こうした講堂の事情によるものであり、講堂の再建を意図して大溝や基壇施設を整備した可能性はあると思われるが、講堂が再建されることはなかったとみられる。

講堂本尊については仮堂に安置されていたと思われるが、遷座の記録がないためにはっきりしない。延慶の大火後に食堂跡講堂後門に造られた仮堂か、講堂に仮堂を造ったとも考えられる。史料⑥には「弥勒寺堂瓦修復事」とあるが、こうした仮堂や弥勒寺にある堂舎の修復と思われる。

東三重塔（輪蔵）・西三重塔

「宇佐宮古図」では、東三重塔と宝形造の輪蔵が描かれている。発掘により、輪造は東塔跡に重複して建てられていることが確認された。東塔の規模は初層一辺長約五m、基壇は一二mあり、この東塔跡に建てられた輪蔵は一辺長約六mある。古図や指図にある東塔の位置に着目して、この塔が移設されたと仮定して発掘調査が行われたが遺構は見つかっていない。

輪蔵の創建については、「弥勒寺造営用途注文案」（史料③）に輪蔵がみえないことや出土古瓦から、元徳元年（一三二九）の弥勒寺の造営記事と結びつけて、東塔は遅くとも延慶二年（一三〇九）の大火までには失われているという見解が示されている。[25]

西塔跡で確認された遺構は、雨落溝（遺存状態の良好な南側と西側の溝）と礎石の掘方である。西塔基壇の幅は一二mで東塔の規模に近いことがわかっている。西塔跡では、新旧二時期の雨落溝が確認されており、旧雨落溝は創建期に遡り、新雨落溝が平安時代～鎌倉時代に想定されている。[26]

「（八幡宇佐宮廻録注進状案）」（史料②）に東塔・西塔がみえないことから、この二つの塔は延慶二年以前には失われていたと思われる。〔表2〕においても東塔・西塔の検出はないので、大内氏による再興事業では復興されなかったと考えられる。

ところで、大内盛見による復興においては、三重塔婆が一基造営されている。正長三年～永享三年(一四三〇～三一)にかけて造営が行われ(史料⑤)、康正元年(一四五五)には修造の命令が下されている。(史料⑥)この塔婆は、東塔・西塔には比定できない。真野氏が、東宝塔のとなりにある千歳松ノ三重塔に注目しているように、輪蔵と塔婆の配置が、東西三重塔と東西宝塔の描写に関係していると考えられる。

東宝塔(千歳松ノ三重塔)・西宝塔

東宝塔・西宝塔ともに〔表2〕では検出できない。史料②でもみえないことから、延慶二年以前には存在してない可能性があり、大内氏の事業でも再建されなかったとみられる。それを示すものに千歳松ノ三重塔がある。真野氏は、この千歳松ノ三重塔に注目され、応永期造営の三重塔婆をこの塔に比定されており、松が八幡神、楡が神功皇后を表すという『託宣集』の記事との関連を指摘されている。[27] この指摘は卓見だと思われる。

東宝塔の近くに神木が描かれており、千歳松ノ三重塔という名称は、この神木が松であることに由来すると考えられる。では、この神木と三重塔の間にある東宝塔はどのように解釈できるだろうか。飯沼賢司氏は、輪蔵が東塔跡に建てられていることから、千歳松ノ三重塔も東宝塔跡に建てられたのではないかという鋭い見解を出されている。真野氏の言葉を引用するなら、「実体のない古代伽藍の塔配置を単に輪蔵新設という実情と重複させただけと受取ることもできる。」[28] という指摘が的確となろう。従って、大内氏の造営で新設されたのは、輪蔵と三重塔婆(千歳松ノ三重塔)ということになり、従来の伽藍である東西の三重塔・宝塔と対比する描写がなされていると考えられる。

鐘楼

桁行三間・梁間二間で南北に長く、柱間は心々距離で約二mを測る。史料②では「二階鐘楼」とあるように楼造の建物で、

古図でも袴腰付(楼造の一種)として描かれている。鐘楼部の東側で登り口と想定される幅七m、長さ二mの張り出しと、北側で屈曲が確認され、この張り出し部上面で検出された溝から室町期と思われる瓦が出土している。[29]

〔表2〕においても、史料と立体的な描き方が一致しているので、古図に描かれた鐘楼の存在は確実となる。「宇佐宮回禄日記」[30]をみると、元和十年(一六二四)十二月に「弥勒寺鐘楼階造」とあるので、近世瓦の出土からもこの遺構が踏襲されていることがわかる。

東大門・西大門

東大門では四個の礎石が確認されている。この礎石から東大門は、梁間三間(門幅約四m)・桁行二間(約五m)あり、礎石の東西心々距離が二・六mに整えられた綿密な礎石配置が行われていることがわかっている。「弥勒寺造営用途注文案」(史料③)には東西南北の大門は「一宇三間瓦葺」とあり、古図では三間一戸二重門として描かれているので、発掘された礎石と整合する。

「宇佐宮権記」(史料⑤)によると、東大門・西大門の造営は永享二年(一四三〇)に材木が調達されている。この記事は永享三年(一四三一)で終わっているため、その後の造営については康正元年(一四五五)の「宇佐宮寺卅七ヶ条掟書」(史料⑥)で確認できる。この掟書によると、「一弥勒寺東大門事、亀童丸可建立之、材木等連々可採用之者也、可為瓦葺歟」とあって、大内教弘は材木を調達して瓦葺の門を建立するように亀童丸に命じているので、永享二年(一四三〇)の段階では、東大門は造営できなかったと思われる。

西大門については、小砂利を引いた道路敷と側溝が検出されており、近世以降の造作であるとみられている。[32] 大永三年の焼失建物を記載した「宇佐宮回禄日記」[33]をみると、西大門は「仁王門」とも呼ばれており、指図においても西大門の柱間に「仁王」という記載がある。嘉吉元年(一四四一)には大内氏が金剛力士象を奉納しており、現在も宇佐宮に伝存している。

以上のことから、西大門は嘉吉元年(一四四一)以降に建立し、東大門は康正元年(一四五五)以降の建立であり、大永の火災まで存在したと思われる。このように、東大門と西大門は、大内氏の再興事業で造営されており、「宇佐宮古図」では存在していると考えられる。

南大門・南中門・北大門についても、上宮の建物描写でみたように建物同士が重ねて描かれていることから、存在した建物を描いたとみられる。

北大門・南大門・南中門については、史料④(元暦文治記)に「四方大門立柱」とあるが、史料⑤・⑥・⑦では北大門・南大門・南中門の記載はみえない。北大門では、「宇佐宮古図」にある北参道が検出されている。[34] 南大門・南中門は今後の発掘調査を待ちたい。

大塔

湿地帯で造営には不適切であるという結果が出されている。遺構は検出されていない。[35] 古図や指図では確認できるが、史料においては検出しない。

小結

弥勒寺については、発掘調査と〔表2〕との比較を試みた。結果としては、「宇佐宮古図」に描かれた金堂・輪蔵・千歳松ノ三重塔・鐘楼・東大門・西大門は存在している。輪蔵と千歳松ノ三重塔を除いた建物は、宇佐宮と同様に立体的に描写されている。これらをふまえると、史料では検出されなかった南大門・南中門・北大門に関しても存在したと仮定できる。輪蔵は宝形造のために、平面的に描かれているが、屋根や宝珠などが精密に描かれている。千歳松ノ三重塔が描かれたところは折目にあたるために部分的に欠損しているが、東西の三重塔と比べるとかなり丁寧に描かれている。講堂においては発掘成果との

比較が難しく、大溝と基壇の位置づけが不十分ではあるが、弥勒寺の建物全体の造営状態から、講堂は造営されなかったと考察した。大塔においても古図では描かれているが、造営されていない建物である。弥勒寺の堂舎においても上宮と同様に、再建された建物と立体的に描かれて建物との関連を一致させることができると考えられる。

以上のことから、建物の描写表現を「宇佐宮古図」解読の視点とし、堂社の描き分けと造営の関係をとおして、次に宇佐宮古図作成時期とその目的について考察を進めていきたい。

（2）成立の時期

「宇佐宮古図」は、通称「応永古図」と伝えられている。この名称からは、応永期の造営に関する絵図という強い印象を受ける。古図が成立した時期を、応永二五年～永享三年（一四一八～三一）とする根拠に、弥勒寺の輪造の存在があげられている。この輪蔵は、明治の廃仏毀釈まで存在しており、大内氏の復興時に旧三重塔跡に初めて造られたと考えられている。古図に描かれた輪蔵の存在は確実であるが、輪蔵以外の建物についても存在時期に注目する必要がある。

宇佐宮と弥勒寺の建物については、再建時期を検討したので、〔表1〕・〔表2〕をもとに古図の成立時期を考えていきたい。

大内盛見による建築予定の建物をあげてみると、永享二年八月十八日弥勒寺長僧坊の材木調達、九月二十六日下宮御炊殿の材木調達、十月三日弥勒寺東大門・西大門の材木調達となっている。大内盛見が急死した後、一旦停滞した復興事業ではあったが、嘉吉元年（一四四一）には弥勒寺に金剛力士像を奉納するなど、造営は継続されていたようである。本格的な事業の再開は、康正元年（一四五五）から大内教弘によって行われており、この時に造営の命令が下されたのは、弥勒寺東大門、下宮北辰殿・御輿宿であった。

長享三年(一四八九)に焼失した下宮の建物は、下宮三殿・北辰殿・講演堂・御供所・竈殿であることから(史料⑦)、「宇佐宮古図」において下宮の描写が可能になるには、康正元年(一四五五)に大内教弘の命令が出されてから下宮が回禄する長享三年(一四八九)の間となる。弥勒寺の東大門においても、この間に造営されたと考えられる。また、菱形池においても船が漕ぎまわれるようにするための池掘りと、池の中島に設けられた文殊堂・大弐堂へ渡る橋の造営が命じられており、古図にも菱形池と橋、文殊堂・大弐堂が平面的ではあるが描かれている。

以上のことから、「宇佐宮寺卅七ヶ条掟書」(史料⑥)が修造・造営の命令であることをふまえると、宇佐宮古図の成立時期は康正元年(一四五五)以降であり、長禄三年(一四八九)に下宮が焼失するまでの間に、大内教弘による造営事業の完成を描いた絵図とみてよいだろう。

新設した輪蔵や三重塔婆(千歳松ノ三重塔)という実情を、古代の伽藍配置に対して重複させて描いていることから、「宇佐宮古図」は復興現状と古代伽藍を対比させた事業の完成図という性格をもっていると思われる。このことからすれば、古代伽藍として描写された建物は、再建予定であったことがうかがえる。大塔の遺構が発掘調査で検出されなかったのは、企画のみで実際には造営されなかったと理解できる。講堂においても造営計画がなされたのであろうが、大溝や基壇施設が整備されたにとどまったと考えられる。

ここで、「宇佐宮古図」を示すと思われる史料があったので紹介しておきたい。[36] 寛正六年(一四六五)以降の文書と推定される、十二月三日「重輔・興勝連署状」(永弘文書二、八二五)には「当社絵図」という文言があり、この絵図とは「宇佐宮古図」と思われる。文書の内容は、大友氏が田染三川守を通じて宇佐宮に絵図の閲覧を申し入れたので、豊前守護代の杉氏が絵図の所在を田染三川守に返答するというものである。この絵図は、宇佐宮に保管されたものと到津公弘が所持するものとがあり、二枚の絵図が作成されていたようである。絵図の所持者が、大内教弘と関わりのあった大宮司到津公弘であることから、公弘が絵図の作成に関与したことが指摘できる。到津公弘が所持した絵図とは、公弘が宇佐宮へ納めた絵図の複製と考えられ、寛

正六年(一四六五)頃には「宇佐宮古図」が存在していたと思われる。

大内氏による弥勒寺の復興は、従来の伽藍配置を意識しながらも、金堂を中心とする新しい寺院の概念に基づくものであった。[37]「宇佐宮古図」のあとに作成された絵図は、造営目的を離れた潤色や仏教的色彩が払拭されていく傾向にあり、[38]宇佐宮・弥勒寺の神仏習合の在り方は、古代・中世との過渡期を迎えていたのである。

おわりに

これまでの考察で、宇佐宮古図の成立時期は康正元年～寛正六年(一四五五～六五)の間であり、大内教弘の段階における復興事業の完成図であることを述べてきた。

大内氏にとって、宇佐宮復興の意義とはどのようなものであったのだろうか。

宇佐宮・弥勒寺の造営は、その費用が九州全域に賦課される事業であった。外部勢力である大内氏が領国を経営するためには、九州最大の荘園領主にして総社である宇佐宮の支配原理に深く入り込む必要があった。そのため、大内盛見は守護分国四箇国と対外貿易という経済力を背景に、宇佐宮の復興を通じてその所領に関与していくことになる。盛見はこの事業を通じて、豊前守守護代として杉氏を配し、各郡に郡代を置いて豊前国の国人層を支配体制に組み込み、大宮司家の四家交代制度を確立、祭礼の復興による宗教権威の回復をめざし、宇佐宮領関係の国人の動員と大内氏への奉公を義務づけている。これにより、大内氏は領国の経営を優位に行うことができるようになった。永享三年(一四三一)に大内盛見が大友氏を攻めて筑前で没した後も、教弘・義隆によって造営が続けられている。[39]

「宇佐宮古図」は、大内教弘の時に完成した堂舎を描いたものであるが、その大内氏といえども、宇佐宮・弥勒寺の全ての堂舎を造営することはできなかった。宇佐宮・弥勒寺の造営は巨額の費用を必要としたばかりでなく、その徴収も容易ではなかったことがうかがえる。延慶二年(一三〇九)の大火から始まる復興事業は、十五世紀後半に大内氏によって完了された。宇

佐宮・弥勒寺は、鎌倉幕府の崩壊から南北朝の内乱を乗り越えて、ここに悲願であった復興を果たしたのである。

しかし、大永三年(一五二三)にはまたも宇佐宮・弥勒寺が焼失してしまう。大内氏は急遽上宮の本殿を造営しているが、大友氏との対立もあって復興を果たせないまま、天文二〇年(一五五一)には陶晴賢の謀反によって大内義隆は滅亡する。大内家を継いだ大友義鎮の弟晴英も、弘治元年(一五五七)に毛利元就によって滅亡し、ここに大内氏の九州支配は終焉した。大内氏の消長とともにその復興事業は終わりをつげ、黒田氏から細川氏による近世の造営へと移っていく。

「宇佐宮古図」は、九州支配をもくろむ大内氏の野望を含み込んで、その事業の様相を今に伝えている。

本論は、「宇佐宮古図」が十五世紀後半に大内教弘による事業の完成図として作成されたという結論に至った。

〔注〕

(1) 中野幡能『八幡信仰史の研究(増補版)上巻』(吉弘弘文館、一九七五)

(2) 真野和夫「宇佐宮境内絵図考―応永古図と寛永五年絵図―」(『大分県地方史』一二五、一九八七)

(3) 前掲論文(2)

真野和夫「到津家蔵「豊前国宇佐宮絵図」の成立」(『大分県地方史』一二六、一九八七)

(4) 『弥勒寺』宇佐宮弥勒寺旧境内発掘調査報告書(大分県立風土記の丘歴史民俗資料館、一九八九)

(5) 濱島正士「絵画に見る建築の描き方」『国立歴史民俗博物館研究報告』第六〇集(一九九五)

(6) 二〇〇三年十二月、別府大学大学院の集中講義で、黒田日出男先生のレポートがきっかけとなって、宇佐宮境内絵図の一つである「宇佐宮古図」を扱うことになった。この絵図を、日本中世史(佐藤真人・鈴木隆敏)・民俗学(古瀬美鈴)・文化財保存修復(石松良介・山本大補・平川文紀子・堀田頼明・新垣聖子)、東洋美術史専攻(平川信幸)の合同で、古図の性格について検討することになり、多くの指摘が出された。

二〇〇三年一月、飯沼賢司先生が便宜をはかってくださり、宇佐宮の古図の原本を閲覧できる機会を得た。この成果は、文化財保存修復・東洋美術史の諸氏が作成してくれたトレース図・折目継目を示した図に明らかにされた。これらの資料を役立ててほしいといってくれた諸氏には本当に感謝している。

(7) 放生会については飯沼賢司氏の研究がある。

飯沼賢司「放生会を読む」『大分県地方史』第一六一号(大分県地方史研究会、一九九六)

飯沼氏は、祭礼空間の景観について和間浜一帯が入江であり豊前と豊後の国境であることを復元された。そこで行われる放生会は、隼人国と接する国境で病や災いを防ぐために行われた弥勒寺の法会が、八幡神と融合して八幡神主体の祭礼へ変化したことを明らかにされている。

(8) 行幸会については段上達雄氏の研究がある。

段上達雄「薦枕考―記号としての御験薦枕の考察―(上)」『大分県地方史』第一四四号(大分県地方史研究会、一九九二)

段上達雄「薦枕考―記号としての御験薦枕の考察―(下)」『大分県地方史』第一四五号(大分県地方史研究会、一九九二)

三角池で刈り取ったマコモを下宮の鵜羽屋で八幡神の御験である薦枕に調整する。御験を御輿に乗せて田笛社・鷹居社・瀬社・乙咩社・大根川社・妻垣社・小山田社などの八幡縁の霊地とされる八箇社をめぐって宇佐宮上宮に納め、古い薦枕が奈多宮に納められる。宇佐宮古図では、「寛永五年絵図」の注釈と比較したところ、田笛社・大尾社・妻垣社・小山田・奈多宮などが比定できた。

(9)『寺社絵の世界』(大分県立風土記の丘歴史民俗資料館、一九九五)

(10) 延慶二年(一三〇九)の大火災以前から応永の復興後までの堂社に関する主要な史料は以下のとおりである。本論では、宇佐宮・弥勒寺の名称を以下の史料によっている。史料①と②は断りがない場合は全て②を典拠とした。

〔史料一覧〕

①延慶二年正月二十二日「八幡宇佐宮廻録注進状案」（鎌倉遺文二三五七〇、壬生文書八幡宮関係文書）

②延慶二年正月三〇日「八幡宇佐宮廻録注進状案」（鎌倉遺文二三五七四、大和西大寺文書）

③文保二年三月三日「弥勒寺造営用途注文案」『益永家記録一』（弥勒寺造営記）

④「弥勒寺号大講堂金堂巳下回禄之事」「講堂・金堂以下造営之事」『元暦文治記』（『神道体系』神社篇四七宇佐）

⑤永享五年十二月十三日「宇佐宮権記」（『神道体系』神社篇四七宇佐）

⑥康正元年八月日「宇佐宮寺卅七ヶ条掟書」（小山田文書九三『大分県史料』第1部7）

⑦永正十五年三月日「下宮回禄次第注文案」（到津文書三二三『大分県史料』1第一部）

⑧「宇佐宮回禄勘考」（『神道体系』神社篇四七宇佐）

①～④が延慶2年（一三〇九）から鎌倉時代末期までの焼失堂社の史料である。①・②はともに案文で、宇佐宮・弥勒寺・在家・僧坊など主要な堂社の記載と註釈があり、実在した建物とその機能をうかがうことができる。①は火災の翌日に作成されたもので、②は①をもとに後日記載を整理したものである。③は、弥勒寺の建物と造営費用を算出したもので、神宮寺である弥勒寺の規模・所属の寺院堂宇・経済的根拠を知ることができる。④は、元暦文治（一一八四～九〇）の頃の宇佐宮と弥勒寺を記録したもので、弥勒寺の復興について編纂した部分がある。慶応三年（一八六七）に書写され、明治四年（一八七一）に編纂されている。⑤は、「宇佐宮寺御造営并御神事法会御再興日記」一・二・三巻ともいう。大内盛見による復興の状況を記載した史料で、堂社の造営状態と祭礼の復興について確認できる。⑥は、大内教弘が宇佐宮・弥勒寺の修造・造営・神事・禁止事項を定めて宇佐宮へ通達したもので、大内盛見以後の宇佐宮造営の様子がわかる史料である。⑦は、長享三年（一四八九）、万代おとく丸の放火によって延焼してしまった下宮の建物を、永正十五年（一五一八）に一覧にしたもの。⑧は、寛弘六年（一〇〇九）から享保八年（一七二三）までの造営について、宇佐宮政所総検校益永一学が考証した記録。大永三年（一五二三）の焼失堂舎を記載して

いる。同系の史料は次のものがある。

「宇佐宮回禄日記」（薬丸文書四一『大分県史料』2第一部）

「宇佐宮回禄并造営覚書」（益永文書三一『大分県史料』（二九）第一部補遺一）

「宇佐神宮造営略記」（『宇佐神宮史』巻十一）

「宇佐宮本殿末社并堂舎炎上考畧記」（『宇佐神宮史』巻十一）

(11)「宇佐宮寺等造営関連年表」『史跡宇佐神宮境内保存管理計画書』（宇佐市教育委員会、一九九二）

(12) 応永二九年六月十三日「宇佐宮条々事書案」（到津文書二〇八『大分県史料』1第一部）

(13) 前掲（11）

(14) 前掲（12）

(15) 護摩堂と法花三昧堂は史料で検出したが平面描写であった。護摩堂について、十月二日「大内徳雄（盛見）書状」（到津文書二〇〇『大分県史料』1第一部）をみると、「宮中護摩堂」（裏打紙端裏書）・「当社護摩堂事既造畢」とあって、大内盛見が護摩堂の完成を祝している。史料⑤にて護摩堂が立柱上棟したのは応永三〇年八月十一日のことであるから、盛見の書状は日付からして応永三〇年の文書と思われ、護摩堂の存在は確実とみられる。法花三昧堂は大弐堂とも呼ばれ、菱形池のなかに建てられている。指図をみると、最初の橋を渡ったところに文殊堂が、二つ目の橋を渡ったところに大弐堂がある。史料⑥で大内教弘は、菱形池の池堀や法花三昧堂に渡す橋の整備を命じている。法花三昧堂は修造とあるから、大内盛見の時には存在していたと思われる。史料⑧では文法花三昧堂と殊堂が焼失していることから、平面的な描き方ではあるが文殊堂も存在していた可能性がある。

(16) 賀川光夫・入江英親・小田富士雄『弥勒寺遺跡』大分県文化財調査報告書第7輯（大分県教育委員会、一九六一）

(17)『弥勒寺』宇佐宮弥勒寺旧境内発掘調査報告書（大分県立風土記の丘歴史民俗資料館、一九八九）

(18) 弥勒寺跡1次調査『宇佐地区遺跡発掘調査概報X』(宇佐市教育委員会、一九九八)
弥勒寺跡2次調査『宇佐地区遺跡発掘調査概報XI』(宇佐市教育委員会、一九九八)
(19) 前掲(17)「I章(3)既往の調査の概要」「II章3小結」
(20) 前掲(17)「III章2弥勒寺伽藍の変遷」
(21) 前掲(17)「II章1遺構2講堂地区の調査」「II章2遺物2瓦(2)講堂地区」
(22) 前掲(2)
前掲(17)「III章2弥勒寺伽藍の変遷」
(23) 益永文書近世の部二七・二八(『大分県史料』(二九)第一部補遺一)
(24) 前掲(17)「II章2遺物2瓦(2)講堂地区」
(25) 前掲(16)
(26) 前掲(18)
(27) 前掲(17)「III章2弥勒寺伽藍の変遷」
(28) 前掲(17)「III章2弥勒寺伽藍の変遷」
(29) 前掲(18)
(30)「宇佐宮回禄日記」(薬丸文書四一『大分県史料』2第一部)
(31) 前掲(17)「II章1遺構1四至に関する調査(4)東大門地区」
(32) 前掲(17)「II章1遺構1四至に関する調査(5)西大門地区」
(33) 前掲(30)

「宇佐宮回禄勘考」(史料⑧)では、「仁王堂」とあるが、「宇佐宮回禄日記」の「仁王門」と同じく西大門を示すと考えてよいだろう。

(34) 前掲（17）「Ⅱ章1遺構1四至に関する調査（1）F地区」

(35) 前掲（17）「Ⅱ章1遺構4大塔地区」

(36) 十二月三日「重輔・興勝連署状」（永弘文書二・八二三『大分県史料』4）について

「宇佐宮古図」の成立時期と思われる康正元年～長禄三年（一四五五～八九）に絞って古図に関する史料を探してみたところ、十二月三日「重輔・興勝連署状」に「当社絵図」という文言があった。大友氏が申している「当社絵図儀」について、豊前守護代である杉重輔と興勝が連署して、絵図の所在を田染三川守に返答している内容である。次に全文をあげておきたい。

就前日者　当社絵図儀、□（依カ）貴殿大友殿御書預御披見候、并御礼委細得其心候、絵図事営中（宮中カ）所持之分、多分先年令紛失候、前太宮司到津方所持候、彼方遠路候故未相尋候、必申調自是御左右可申候、不可有無沙汰候、恐々謹言、

十二月三日　　興勝（花押）

重輔（花押）

田染三川守殿御報

史料には年号がなく、「当社絵図」という文言だけでは「宇佐宮古図」とは断定できない。まずは、「前大宮司到津方」という文言から大宮司を特定してみたい。この文書には、豊前守護代である杉重輔と田染三川守という名前があり、田染三川守については同じく永弘文書の長禄三年（一四五九）十一月七日「畠木忠秀外二名連署間別銭請取状」（永弘文書二・八二四）にも見えることから、大宮司の在任期間は大内氏が大宮司四家交代制を確立させた時期にあたると考えられる。大内氏は六年に一度の行幸会を行って大宮司を交代させているので、系図と関連史

料との比較から大宮司を特定することは可能だと思われる。これから、十二月三日「重輔・興勝連署状」の成立年代を推定し、「宇佐宮古図」との関連性があるのかどうか考察していきたい。

一、文書の作成年代の推定

「前大宮司到津方」の大宮司を特定することで、文書の作成年代を推定していきたい。「宇佐宮行幸会根本并再興次第（到津文書一・二七一『大分県史料』1第一部）には、行幸会を執行した大宮司が列記されている。それを見ると、

応永三十年（一四二三）到津公兼　永享元年（一四二九）宮成公佐
永享七年（一四三五）安心院公世　嘉吉元年（一四四一）出光公順
文安四年（一四四七）宮成公正　享徳二年（一四五三）到津公兼
長禄三年（一四五九）安心院公見　寛正六年（一四六五）到津公弘
文明三年（一四七一）宮成公幸　（以下省略）

とあり、文明二年（一四七〇）十月日（益永文書『大分県史料』）には、大宮司宮成公幸、前大宮司到津公弘、前大官司安心院公見とあるので、「前大宮司到津方」とは到津公弘であることがわかる。これにより、文書の作成された年代は、彼が大宮司の任期を終えた寛正六年（一四六五）より後の文書であると考えられる。

二、「宇佐宮古図」との関連性

次に文書の内容をみてみると、絵図は二枚あったことがわかる。文書には、「絵図事営中所持之分、多分先年令紛失候、前太宮司到津方所持候」とあり、宮中にある絵図は紛失しているため、到津公弘の所持する絵図があるという報告がされていることから、絵図の所持者である公弘が、絵図の作成に関与したのではないかという指摘ができる。到津公弘は、享徳二年～長禄三年（一四五三～五九）まで大宮司を勤めてい

る。公弘の就任中には、大内教弘の宇佐宮参宮と造営事業の開始があり、大内教弘にとっては大内家の家督を継いだ最初の宇佐宮行幸会を控えていた。到津公弘は、大内教弘と関わりのある大宮司であり、復興事業と行幸会を遂行した大宮司であった。公弘が、「当社絵図」の所持者であることをふまえると、「当社絵図」とは「宇佐宮古図」を示すと考えられ、「宇佐宮古図」に関わった可能性が高いと思われる。

また、到津公弘は、享徳四年(一四五五)七月に「宇佐宮斎会式」という長大な神事要綱を作成しており、宇佐宮復興と大宮司就任にかける意気込みを感じさせる。彼が大宮司として復興事業に尽力したことは想像に難くない。「宇佐宮古図」には、摂社や神域を含む境内全域が描かれており、宇佐宮の重要な神事である行幸会や放生会が意識されている。こうした構図をとらせる知識をもっていたのは、宇佐宮の斎会を熟知した公弘であったと思われる。

これらのことから、到津公弘が復興事業の完成図として「宇佐宮古図」を作成し、一枚を宇佐宮へ納め、もう一枚は控えとして所持したと推測できる。大友氏が申している「当社絵図儀」とは、絵図の閲覧のことであり、大内氏の宇佐宮復興に関心を寄せたことによるものと思われる。

「当社絵図」のみでは確たる証拠はないが、文書をとりまく状況から、寛正六年(一四六五)には「宇佐宮古図」が存在し、作成者が大宮司を勤めた到津公弘である可能性を提示しておきたい。

(37) 下坂守「寺社絵図」『中世荘園絵図大成第二部　荘園絵図の周辺』(河出書房新社、一九九七)

下坂守氏が寺社境内絵図の性格について各種絵図を比較考察され、寺社境内図を大きく二つのグループに分類している。一つは寺院を描くグループで、寺社勢力の側から描かれた絵図には本来あるべき姿としての古い時代の伽藍が描かれており、境界確認や参詣という世俗的な目的とは一線を画した一種の記録としての性格があるという。もう一つは神社を描くグループで、遷宮という本殿の造営修理にともなって実施される神社固有の宗教行為に関係した絵図作成の目的があり、寺院とは異なる意味で高い記録性があるという。下坂氏の論を受けるなら、「宇佐宮古図」には復興をとげた宇佐宮が描かれているが、一方では弥勒寺伽藍などの本来あるべき姿を記録に留めるという双方の

主張が複合して成立した構図と考える。

(38) 前掲論文（2）（3）

(39)『大分県の歴史』（山川出版、一九九七）

〔付記〕

別府大学大学院の集中講義（黒田日出男先生）のレポートがきっかけとなって、院生での共同研究という貴重な経験をすることができた。御指導をいただいた飯沼賢司先生、濱島正士先生、「宇佐宮古図」の原本を閲覧させてくださった宇佐神宮に厚くお礼申し上げます。

（別府市中須賀元町四組　オーパーツ中須賀）